

石巻健育会病院

症 例 概 要 患者：30代 女性

病名：左視床出血

入院期間：令和5年4月 ～ 令和5年8月

経過：もやもや病にて幼少期に血行再建術を受けている。平成29年5月下旬、左視床出血、陳旧性の多発脳梗塞あり、身体機能は保たれていたため自宅退院。

令和5年3月中旬、脳室穿破を伴う左視床出血再発。意識障害、重度片麻痺を呈していた。令和5年4月上旬、当院回復期病棟入院。今回の病前から認知機能低下があり、在宅では外出をすることもあまりなく、母親見守りの下、自身の身辺動作の自立レベルで生活していた。

内 容

当院入院時、JCS:I-2、右片麻痺Br.stage：上肢I、手指II、下肢I、失語症、理解・記憶力の低下があり食事動作以外は全介助の状態(FIM28点 運動18点/認知10点)であった。不安な表情や無表情でいることが多く、無気力な印象が強かった。

入院時カンファレンスでは車椅子レベルでの退院が予想されたが、同居家族は認知症の祖母、片麻痺の父親、乳がん治療中の母と、ご本人のADLが自立に至らない場合はご家族の誰かが施設入所を検討しなければならないという厳しい状況であった。そのためご本人の身辺動作自立を目標にリハビリ介入を開始した。しかし、病前からの認知機能低下、今回の失語等の影響により精神状態が不安定となり、新しいリハビリの訓練や生活環境の変化に適応できず、身体機能が向上してもなかなかADLの向上に至らなかった。リハスタッフと看護師で相談し、ご本人が話しやすいスタッフが対応するように配慮し、ご本人の訴えを親身に傾聴した。納得するまで説明し、不安が少ない状態で入院生活を送れるようチームでご本人の精神状況も共有しながら対応した。その結果、ご本人の「自分でやろう」という意欲の向上が見られ、笑顔などの明るい表情がよく見られるようになった。

退院時には杖歩行を獲得し、入浴動作以外の身辺動作は準備があれば自立レベルとなった。退院時FIM68点（運動50点/認知18点）と向上。何よりも表出が増え、他者との交流が増加したことで退院後のサービス利用にスムーズに繋げられる見通しが立ち、在宅での受け入れが容易な状態となった。難渋する家族状況ではあったが、チームで親身に支援し、ADLが自立したことでご家族の誰も欠けることなく元の生活に戻ることができた。また、身体機能の向上は誰の予想よりも上回っており、当院退院後、I病院を受診した際には主治医から「予想以上の回復に驚きました。心から感謝申し上げます。」と

感謝のお言葉を頂いた。

FIM利得 運動：28点 ⇒ 50点(22点改善) 認知：10点 ⇒ 18点(8点改善)